平成 29 年 9 月 29 日(金)
練馬区立開進第四小学校
校 長 佐 々 木 秀 之

感　謝　の　心

校　長　佐々木　秀之

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉のとおり、うだるような暑さがいつの間にか爽やかな風へと変わり、虫の声の便りが聞かれるようになってきました。子供たちは秋晴れの空の下、明日の運動会に向けて、練習・準備に全力で取り組んできました。

＊

この夏に開催された陸上の世界選手権において、男子 4×100mリレーで日本（多田修平選手、飯塚翔太選手、桐生祥秀選手、藤光謙司選手）は３位となり、世界選手権で初の銅メダルをつかみ、同種目では昨夏のリオデジャネイロ五輪の銀に続くメダルを獲得しました。

桐生選手は６月の日本陸上競技選手権 100m決勝で４位に沈み、個人での世界選手権出場を逃しています。藤光選手はリレーの補欠メンバーだったため予選には出場しておらず、決勝で急遽アンカーに起用され、大舞台でリレーを走るのは初めてでした。二人は個人種目の出場はありませんでしたが、気持ちを切らすことなく調整し、見事に歴史的なメダル獲得に貢献しました。決勝で桐生選手は自分の調子がよいことから、藤光選手にバトンを渡す助走距離を練習より１足分伸ばしてほしいと伝えたといいます。藤光選手はレース後、「昨年（リオデジャネイロ五輪）は支える側、今年は走る側。両方経験してあらためて６人で取ったメダルなんだなと実感しました」とコメントし、走り終えた直後に撮った、出場できなかったサニブラウン選手、ケンブリッジ選手を加えて日の丸を掲げる６人の笑顔の写真を公開しています。

体格や身体能力で劣る日本の選手たちが、なぜ快挙を達成できたのか。世界の多くの国では、手のひらを上向きにしてバトンを受ける「オーバーハンドパス」を採用しています。一般的に体育の授業で指導するのもこの方法です。日本代表が採用しているのは、技術的により高度な手のひらを下向きにしてバトンを受ける「アンダーハンドパス」と呼ばれる方法です。日本は、このアンダーハンドパスに磨きをかけることで、個々の走力以上の結果を残してきたのです。選手たちは、感動だけではなく、「諦めないで、願いを込めて努力すれば、どんな環境にあってもいつか『夢』は叶う」というメッセージを伝えてくれました。

藤光選手はさらに、「ここに立てたのもいろんな方々の支えがあったからこそです。応援してくださった皆さん本当にありがとうございました」と感謝の心をつづっています。

＊

明日の運動会は、一流アスリートのような記録が出るわけではありません。しかし、子供たちは、オリンピズムやスポーツマンシップと同じように、ルールを守り、互いに競い合い、高め合う姿を見せてくれることと思います。そして、学校の校風となった語先後礼、メモを見ないであいさつをする等の姿をもって、皆様に感謝の心を伝えてくれることを期待しています。